

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03533

研究課題名(和文) インド被差別民解放運動と仏教復興運動にみる当事者性の獲得に関する宗教人類学的研究

研究課題名(英文) Religious anthropological studies on becoming a party concerned by examining the Buddhism restoration movement engaged to Dalit discrimination liberation movement

研究代表者

関根 康正 (Sekine, Yasumasa)

神奈川大学・付置研究所・研究員

研究者番号：40108197

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：元不可触民差別解放のためにアンベードカルが開始した仏教改宗運動は新たな指導者として仏教僧佐々井秀嶺に引き継がれた。ナーグプルを拠点にした佐々井の改宗運動と糾合したダリト民衆の生活実践を調査し社会苦を自己の問題とする当事者性の獲得の仕方に注目した結果、その獲得方法が、アンベードカルが改宗先に仏教を選んだ理由と同根の自発自立思想の実践であることがわかった。佐々井、アンベードカル、龍樹、ブッダの言説を遡りダンマに立ち帰ることで絶対神なき宗教すなわち存在の無常に徹した合理性に立つ自立思想を説く仏教こそが、ヒンドゥー社会を脱して当事者として被差別の困難に立ち向かう自己と社会の同時思想革命を導くのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

被差別民解放における尊厳獲得の道として自発自立の慈悲を説く仏教の核心としてダンマの教えが再発見され、宗教の枠に甘んじ現実の社会問題に関与しない仏教教団への批判的助言となる。神の前で平等を説く宗教が、絶対神への人間の依存によって自立的判断が阻まれ排他的差別行為を産み出すというアイロニーがあるからだ。破格の仏教僧佐々井秀嶺の人生のカルマ即ニルヴァーナを求めての格闘の足跡は、インド被差別民衆の抱える社会苦を共苦として慈悲を全うする上述のダンマの実現であった。1960年代からの半世紀に及ぶ佐々井の膨大な手記や資料のアーカイブ化が整えられた。エンゲイジド仏教研究の基礎資料として研究の深化が可能になった。

研究成果の概要(英文)：The Buddhist conversion movement initiated by Ambedkar to liberate ex-untouchable discrimination was taken over by Buddhist monk Shurei Sasai as a leader. As a result of investigating the living practices of the Dalit people who were in accord with the conversion movement of Sasai based in Nagpur and paying attention to the method of acquiring the party-ship that makes social suffering a self-problem, It turned out that such acquirement way and the reason with which Ambedkar decided to convert to Buddhism share the same root of the practice of the self-reliant thought. By going back to the discourses of Sasai, Ambedkar, Nagarjuna, and Buddha and returning to Damma, Buddhism, which preaches a religion without an absolute god, that is, an self-reliant thought that stands for the rationality based on impermanent of existence, is judged as the unique religion which makes possible escape from Hindu society and leads to a simultaneous revolution of self and society overcoming discrimination.

研究分野：文化人類学

キーワード：佐々井秀嶺 アーカイブ化 被差別民解放運動 改宗 アンベードカル 思想としての仏教 ダンマ エンゲイジド仏教 ア

## 1. 研究開始当初の背景

これまでに代表者の関根が明らかにしたように現実のカースト社会で低カースト差別と不可触民差別は決定的に異なっている。「差別者」と「被差別者」の二者関係ではなく、「差別者」と「共犯者」と「被差別者」とからなる<三者関係の差別>という構造的差別で現実をとらえなければ正確な差別の実態は見えてこない。構造的差別とはその構造に差別の再生産メカニズムが組み込まれている差別の在り方である。支配する者は社会のなかで支配される側になる底辺の人々の間に、「共犯者」(「支配者によって周辺化されている者だが支配に同化・包摂されることで支配する差別者と共に支配共同体を構成する者になる」と「被差別者」(「支配共同体の存在を裏書きさせるために被差別に固定された形で排除された者」とを意図的に作りだし、その間で争わせる。その争いでは人は誰も進んで差別されたくないで、支配共同体の中に入ろうとして差別者の示す価値を復唱してしまい共犯者になっていく。被差別者と差異化しようとするこの共犯者の中心への同化行動が差別者と共犯者の二者の共謀を成立させ、支配システム(共同体)を再生産し続ける。差別者のイデオロギー言語によって被差別者に与えられた否定的スティグマを、共犯者は模倣復唱して自らはそうではないと踏み絵を踏んでいく。共犯者としての低カーストと被差別者としての元不可触民との間の分水嶺がそこにある。踏み絵を踏まぬ者やスティグマを負った者が被差別者として固定され続け、絶望的な永続的差別が再生産されていく。そのような再生産メカニズムが社会に内蔵されていなければ永続的な被差別者などは存続しえない。

ではどのようにしたらこれに抗して差別状況を壊せるのか。その答えは共犯者をなくすことにある。それは共犯者の存在が差別を再生産するか否かのキャスティング・ボートを握っているからである。人々を包摂する支配的差別イデオロギーの中であって、自分にはスティグマを貼られたくない、だから支配的価値に同化しておこうという「逃げの思考」が人々に働いて共犯者が生まれ続け差別構造は維持されていく。したがって論理の必然として、この構造的差別を自壊させる肝は共犯関係に入らないことにある。すなわち、共犯者であることを止めるために被差別に置かれる異者を自分のものにする自己変容に向かう「挑む思考」に踏み出すことが肝心である。この「挑む思考」こそが、<三者関係の差別>構造を瓦解させるがゆえに差別者をもっとも恐れさせる抵抗思考である。支配価値を離脱すること、それは自己が差別抑圧してきた異者になることであるが、それは自己の中に異者がいることをありありと見出すことと同じである。言うなれば、同と異の融合した新しい深い自己の発見であり、光を望む自分と闇に沈潜する自分を矛盾のなかに共存させる道をたどることとも言える。それは自己不変のまま救済論的な上からの眼差しの反差別運動などとは根本的に異なる。自身の身を社会の縁辺や底辺に沈める構え、すなわちマイナーなものに成ろうとする運動的所為が作り出す光と闇とが自己と他者を貫いて共存するという自己変容による革命的な創造である。そこで「倫理(モラリティ)の核心」は、自分をマイナーなものに生成変化することにある。確かにアンベードカルは『カーストの殲滅』の中で、カースト・ヒンドゥーの自己不変の偽善的な救済論的なモラリティ(M.ガンディー的なモラリティ)を非難し、本当のモラリティ、ここで言うところの自己変容によってマイナーなものになり続けることの重要さを指摘した。

その「倫理(モラリティ)の核心」に生きること、すなわち、共犯者の立場から被差別者の立場へと自己変容を果たすことを、<当事者性の獲得>として把握することができると考えている。その転換の理論的筋道はこうである。現場で生起している問題についての事実認識の探究の継続が、その深みに至って、研究者(問題の外部者)の生と現場の人々(問題の直接的当事者)の生との間に相似性を感じさせる共振を引き起こす。そこでは、両者の生において被差別問題が前景化し我がこととして自覚化される<共当事者性>の現出を見るであろう。<対象の問題が自己の生において我がこととして切実に感得されること>が当事者性の獲得の内実だと考えれば、外部者の当事者性の獲得と現場当事者の当事者性の獲得が同時に開花するのである。つまり対象の認識の深まりを通じてその対象の発する痛み(感覚情動)が自己の生のうちに共鳴した痛み(感覚情動)となって了解され自らの生き方という実践に組み込まれていく。生きるために苦しむ人間は、生きるために死を選ぶという生の逆説までも含めて考えて、生き抜くための希望を常に求めている。絶望は希望の内にある。生ある者はいかなる絶望的な場面でもそれを希望に変えて生き抜こうとする。その絶望の深みで希望をはぐくむこと、希望を絶やさないことが倫理の核心の噴出口である。そういう倫理は、ジル・ドゥルーズの言う理論即実践(理論と実践は相互に中継地点である)という形で顕現するに相違ない。

以上が、本研究プロジェクトの目的設定の背景であり、問題意識である。

## 2. 研究の目的

上記のような現実認識と見通しに立つ本研究プロジェクトは、「絶望を希望に変える思想と方法」としての<当事者性>の獲得を実践的に可能にする理論と方法を探究深化させることを研究目的にする。実はそういう当事者性は、自他の間の関係の中で起きるので常に正確には<共当事者性>と言う関係論的性格になることから、ここでの目的は、<共当事者性>の獲得と言っても良い。そうであるなら、そのような創発的事態が起こる共有場の構築が、その人の存在自身がそういう磁場を創るような偉人(特権的な魂)より、そうなりえない凡夫凡人にとってより重要

な意味を帯びるに違いない。このような本研究の取り組む課題を徹底して考え抜かないかぎり、犠牲を出し続ける差別の再生産を社会から放逐することはできない。その意味で本研究は、インド社会のみならず、日本社会をも含め被差別民問題を抱えている社会の根本的変革に汎用性を有する意義深い基礎研究であるとの確信に基づいている。本研究は人間社会と差別という根深い問題、言うなれば人間社会に不可避にまとわりつく「人間的」問題に挑戦し、その解決に向けて、容易に差別心にとらわれ「逃げの思考」に走りやすい普通の人間が、いかにしたらそこから少しでも離脱し「挑む思考」を持てるようになるか、あるいは少なくとも共犯者に進んでなる手前で自らの差別心を無効化する行動にでられるかを考察し、差別脱却の基礎研究を目指すものである。

本研究では、インド社会の被差別状況を目の前にして「挑む思考」を実践し「倫理の核心」を生きる形で解放運動をまさに牽引展開した、B. R. アンベードカルと佐々井秀嶺という二人の偉人の人生・思想・運動を中心に学び、そこから普通の人々にも開かれた「挑む思考」と「倫理の核心」を体得する道の要諦をつかみ出すことを目指す。アンベードカルが自ら被り、「不可触民」と呼ばれた同胞と共有しようとした絶望をいかに克服しようとしたか、いかに希望を紡ごうとしたか、それを歴史的な脈も勘案しながら深く考察したい。元不可触民として生まれたアンベードカルは当事者が強烈な大悟の当事者性を獲得する過程を教えてくれる。そのアンベードカルの意思に感銘し、自らの身をインドの大地に投げ出し、エンゲイジド・ブディズムをまさに実践し「元不可触民」解放運動を牽引してきた稀代の日本人仏教僧佐々井秀嶺師については、インドの被差別民ではない者が仏教の実践を通じて非当事者(外部者)がいかにして当事者性を獲得するのか、そのことを中心に学びたい。アンベードカルと佐々井師という絶望に見える状況の中に希望を紡ぎ出す導師の生き様を道標にして、人々の微細にして深刻な苦悩と幸福を注視し、絶望と希望の交差の現実を活写する宗教学と人類学の共同(協働)研究を本研究において実践する。

### 3. 研究の方法

本研究グループの研究方法は、1) インドの文脈での仏教復興に関する文献的研究と、2) 仏教徒(仏教に改宗した元不可触民)による解放運動の歴史と現在に関する観察・聞き取りというナグプル市を中心とするフィールドワークとから構成され、両者が相互乗り入れしながら対話的研究を行っていく。1) の文献研究では、アンベードカルの仏教改宗にいたる不可触民解放運動に用いられてきた関係仏典や史料の収集と解析及び佐々井秀嶺が所蔵する膨大な仏教改宗運動史誌料のデジタルアーカイブ化とその分析を実施する。2) のフィールドワークでは、各メンバーが宗教学及び人類学の視点から、各年度に3週間程度の現地調査(インド、スリランカ、英国など)を敢行し、アンベードカルに導かれて1956年に行われた仏教への集団改宗以降(ポスト・アンベードカル時代)の仏教徒の近年の被差別状況当事者としての抵抗運動の状況をめぐって探索する。そのための中心的な調査地はマハラシュトラ州のナグプル市となるが、比較調査として南インドの元不可触民の状況、スリランカの仏教徒のインドとの交流状況、さらに英国に移住した元不可触民およびアンベードカライト(仏教改宗者)の抵抗運動と国際ネットワークなどの状況をフィールドワークすることで、ミクロな深い視野とマクロな広い視野の相互補完をめざす。

### 4. 研究成果

(1) 本プロジェクトは三人の文化人類学者(関根、根本、鈴木)と一人の仏教学者(志賀)からなる学際的な共同研究であり、ここに示す研究成果は、各自の調査研究活動の継続とその各自の成果を持ち寄り交流し討議を重ねたことで得られたものである。その成果の中心軸にあるのが、<アンベードカルはなぜ仏教徒への改宗を決意し実行したのか>という問いであることが最終的に改めて自覚されてきた。すなわち、これまでも繰り返されてきたこの問いの読み解き方に、新たな十全な解答を示しうることが本研究の大きな成果である。ヒンドゥー社会の中で被差別に苦しむ不可触民衆を「ブッダの教え」(ダンマ)の下に糾合するという、いわゆる仏教への集団改宗による平等社会の実現に向けたアンベードカルの実践は、いかなる論理でなされたのかについて、実態調査と文献研究の交差から本研究は以下のような有力な解釈理論を提供できることになった。

仏教への集団改宗実践には、ブラーマン中心主義の「宗教」(この鍵括弧つきの宗教の用法については後述)であるヒンドゥー教に縛られた社会に対して、ガンディーとは異なって、不可触民差別を社会内部からカースト・ヒンドゥーの自省が働いて自浄的に解決することを期待するのは不可能であるとのアンベードカルの絶望に裏打ちされた最終的な決別の判断がまずあった。ではそのようなヒンドゥー教という「宗教」に決別してどこに向かうべきなのか。先取りして言うと、その答えをアンベードカルは「思想」(これも後述)として「ブッダの教え」に見いだした。その神依存ではない「思想」の説く自立的な平等主義に差別解放の可能性と希望を託そうとしたのであった。以下に、このようなアンベードカルの決断の内実の理路を示す。

ここで重要なことは、「宗教」と「思想」の相違である。常識的な理解では、ヒンドゥー教やキリスト教やイスラーム教そしてシク教などと共に、仏教もまた一「宗教」であるとされる。しかしながら、今日見られる組織化され、その内部に階梯を有する仏教教団のあり方を一挙に遡及して、ゴータマ・シッダールタという人物が悟りを開き、その後サンガの出家者と在俗の衆生に説いた「ブッダの教え」にまで立ち返るならば、神という絶対的な存在を前提にしないどころか、

自覚的にそういう固定された絶対的存在を否定していることは明らかで、仏教の原型は、先に示した前者4つの「宗教」とは明確に一線を画する(アンベードカルの中でカースト否定のシク教は改宗先の候補に挙げたことがあるが、その思想的十全さにおいて仏教に如かずと判断された)。この絶対的な存在の神に依存した人間の生き方を説く宗教をここで「宗教」と呼ぶならば、その意味では「ブッダの教え」(ダンマ)は「宗教」ではない。相対性の世界の無常を説いた教えは、人間一人一人の涅槃(ニルヴァーナ)の実現への自発的・自立的な覚醒への道の辿り方を説くものであった。ブッダの創始したサンガは指導者なき組織であった。ブッダは自覚的にサンガをそのように維持した。出家者からなるサンガも一人一人の出家者が自立的に八正道をきわめてニルヴァーナを体得するための切磋琢磨の場に過ぎない。そこでは一人一人がカルマ即ニルヴァーナを目指す。それは在家信者のために理想的な生活モデルを提示し続ける意義を有する。サンガも在俗衆生もこの世の四苦八苦にいかに向き合い、いかに脱するかという共通の目標を本願として共有している。これはいわば、神も指導者も絶対化しないことに見て取れる無頭的な自立「思想」こそが、「ブッダの教え」の核心であることをよく示している。

ここで取り出したいことは、アンベードカルはこの「ブッダの教え」という仏教の原点に立ち返って仏教を「宗教」としてよりも「思想」としてとらえていたと解釈するのが自然であるという点である。そのことは、その渾身の著書『ブッダとそのダンマ』を読めば明らかである。アンベードカルは、この「思想」としての「ブッダの教え」を仏教理解の根底に据えることこそが、「宗教」としてのヒンドゥー教を根底的に覆すことを可能にすると判断し、不可触民解放運動の理論武装として自覚的に「ブッダの教え」としての「仏教」への改宗を選びとったに相違ない。アンベードカルの仏教理解を科学的合理性に基づく浅いものとみなして批判する向きがあるが、そのような批判者の見方自体に重大な瑕疵がある。というのは、理解が浅いのはそういう批判者の方であって、アンベードカルの合理的仏教理解こそが、「ブッダの教え」が有する神秘的な絶対的存在の否定と信者の自立思想の探究という意味での神否定の合理性に忠実なものと理解できるからである。つまり、「ブッダの教え」には、近代西欧的な人間主体の実体主義的合理性(人間実体主義であるから人間を超えた神の絶対存在も実体的に把握することになる)とは根本的に異なる人間無常の宇宙論的合理性で貫かれている。アンベードカルには両方の合理性が見えていたに違いなく、しかもそのうえで「ブッダの教え」を貫く後者の合理性に与したのであった。端的に言えば、アンベードカルはこの「ブッダの教え」の「思想」原理をこそ、「宗教」であるヒンドゥー教からの脱却のために用いたのである。その文脈からすれば、絶対的な神存在を有する「宗教」としてのキリスト教やイスラーム教やシク教への改宗は、アンベードカルの脱ヒンドゥー教のための選択肢としては無意味であることの理路が見えてくる。「宗教」から「宗教」への改宗では人間の自立的平等主義は実現できない。絶対的存在(神)を描定する依存的「宗教」からすべてが相対的な無常の自立「思想」への脱出の仕方こそが決定的に重要で、その意味ではアンベードカルにとっては「ブッダの教え」に始まる仏教以外に選択肢はなかったという理路になる。このように議論してくると、このアンベードカルのヒンドゥー教徒を仏教世界に導き入れた実践を「改宗」運動としてとらえる通常理解が正しいのかどうか、疑問に思われてくる。すでに明らかなように、アンベードカルの真意においては、「宗教」依存から脱して自立「思想」に人々が立つことこそが、慈愛に満ちた平等社会の実現に不可欠だという確信があったと解するのが妥当であろう。

「改宗」仏教徒を<新仏教徒>と呼ぶことは今日否認され、<仏教徒>と称する動きがあるが、それは、その一群の人々を「改宗」した者とする浅い理解(「宗教」から「宗教」へ移行したという理解)を払拭する意味で正しい。しかし、その呼称批判の真意をさらに徹底するならば、<「思想」としての仏教の徒>の誕生、すなわち「ブッダの教え」を自らの生きざまの道標にする人々の存在の誕生と言わなければならない。少なくともアンベードカルの見ていた世界は、そういう人間の自立による平等社会の実現という「思想」革命のことではなかったかと推察できる。そのことを洞察して書き残されたアンベードカルの『ブッダとそのダンマ』こそが、その確かな証拠である。そのことを結果的に明らかにしてくれる興味深い事態がある。山際素男訳の『ブッダとそのダンマ』には、山崎元一氏の解説と佐々木秀嶺師の解説が収められているのだが、そのコントラストがここでの立論をいみじくも鮮明にしてくれるのである。その二つの解説を読み比べると、歴史研究者であり、『インド社会と新仏教』の著者山崎元一氏が「宗教」として仏教をとらえて解説しているのに対して、仏教僧である佐々木師の方がむしろ差別社会の現実にコミットメント(エンゲイジメント)する「思想」としての仏教をとらえているという逆説が見て取れるのであった。佐々木師の解説においては、アンベードカルがブッダそしてナーガルジュナの「思想」革命の精髓を自己と社会の同時救済としての不可触民解放運動において根幹に据えたことが語りだされ、その不滅の法灯を佐々木師自ら引き継ぐ覚悟の言葉がほとばしり出ていて、圧倒される。こうして、ブッダ、ナーガルジュナ、アンベードカル、佐々木秀嶺の間に認められる非連続の連続という「無自性=空=縁起」の奇跡のダイナミズムを感得するのである。

ここに示した成果を得るにあたって、メンバーの仏教学者志賀浄邦によるアンベードカルの思想の集大成である最晩年の著作『The Buddha and his Dhamma』(1957年出版)に関しての周到な読解研究の蓄積が大いに貢献していることを改めて強調しておきたい。まさに人類学と仏教学の共同研究の成果であると言える。

(2)以上の(1)において述べてきた通りの本研究の中心的な成果は、アンベードカルと佐々木秀嶺と現地の被差別民仏教徒の三つの活動を結び合わせる交点において、仏教学と人類学と

の協働討議がなされ、そうすることで成し遂げられたものである。最後に以下で、こうした本研究の成果の意義を確認していきたい。

元不可触民差別解放のためにアンベードカルが開始した仏教改宗運動は新たな指導者として仏教僧佐々井秀嶺に引き継がれた。ナグプルを拠点にした佐々井の改宗運動とそこに糾合した仏教徒のダリト民衆の生活実践を調査し社会苦を自己の問題とする当事者性の獲得の仕方に注目した結果、その実践的な獲得方法が、アンベードカルが改宗先に仏教を選んだ理由と同根の自発自立思想に裏付けられていることが明らかになってきた。このポスト・アンベードカル時代のダリトとしての仏教徒の実践の内容は、それが限定されたものではあっても、被差別の絶望を希望に変える実践思想としての「ブッダの教え」という原理論の救済力を力強く証明している。その原理論とは、佐々井、アンベードカル、龍樹、ブッダの言説を順に遡り、ダンマにまで立ち返ることで絶対神なき宗教、すなわち存在の無常に徹した合理性に立つ自立思想を説く「ブッダの教え」としての仏教ということである。その原理論の働きゆえに、アンベードカル入滅後も仏教への改宗者が増え続け、今日の仏教徒の前向きな活動を見るに至っている。この仏教の原理論こそが、ヒンドゥー社会のくびきから解放されて、当事者として非人間的な被差別状況の困難に立ち向かう自己と社会の同時思想革命を導くだろうという希望を人々の魂に与えると熟考し信じたアンベードカルの洞察と実践の賜物である。そして、その事実を佐々井秀嶺という遠来の仏教僧が正しく引き継ぎ広めてきたという奇跡を引き起こした。

こうして、インド社会の底辺社会の現場から被差別民解放における人間的尊厳獲得の道として、共苦の上に立ち上がる自発自立の慈悲を説く仏教の核心としてのダンマの教えが現実に関力を持っていることが再発見された。この仏教の原理論は教団化(宗教化)した仏教を超え出ている。ここに示す研究成果は、「宗教」の枠に甘んじ現実の社会問題に関与しない既成仏教教団への批判的助言ともなっている。神の前で平等を説く宗教が、絶対神への人間の依存によって信者の自立的判断が阻まれ排他的差別行為を産み出すというアイロニーが実際に起こっているから、この点は確かめておきたいのである。破格の仏教僧佐々井秀嶺の人生のカルマ即ニルヴァーナを求めての全人的格闘の軌跡は、インド被差別民衆の抱える社会苦を共苦として受け止め、それに対して慈悲を全うする佐々井のダンマの実践そのものにおいて開花結実している。

このような佐々井秀嶺の足跡は、本研究で意識されてきた当事者と当事者性の区別の必要、すなわち、外部者も当事者性を持ちうるし、逆に言えば当事者であっても当事者性をもてない場合があることを教えてくれている。昨今はエンゲイジド仏教という言葉が多用され研究もされているが、本研究の成果はそのエンゲイジメントとは何か、それがいかに可能になるか、などに重要な示唆を与えている。そのことを示すために、より踏み込んで〈共当事者性〉という概念を打ち出した。一仏教僧としてナグプルに降り立った佐々井を訪れた深い当事者性とは、まさに目の前の被差別民の残酷な窮状、非人間的苦悩が佐々井の身を貫いて仏教の慈悲に届いたとき仏教僧としての自己の生きざまとして現出した、内奥に発露する〈共当事者性〉であったのだ。このことに学べば、研究者の研究も、外部者として上からの救済的なまなざしにとどまるわけにはいかない。要するに、研究者もまた佐々井のように研究し生きなければならない。研究が深化して、被差別民に研究者自身が生成変化する地点を自らの実践理論の立脚点にするよう目指すべきなのである。その透徹した理論によって、被差別民を産み出している世界の構造に革命を起こせるものでなければならない。そのためにはまず、真剣勝負の実験として、その理論で研究者自らの生きているアリーナとしての学界という世界で革命を起こす必要がある。そこでその理論が使い物になることが確かめられたなら、被差別民の置かれたアリーナでも使い物になるであろう。それこそが理論という名に真にふさわしい。ここで明らかにしてきたアンベードカルによって再発見された仏教の原理論はすでにそのようなものであった。アンベードカルはその意味でも真の研究者であった。私たちのような凡夫なる研究者もまた、自己の研究者としての精進がそのまま世界の慈悲になるように励まなければならない。私たちもまた人文学・社会科学の研究者として、人間の人間らしい生を創出するような本物の理論を探究することを怠らなければ、そうなるはずである。

以上のような本研究の成果は、本研究の基盤資料になった1960年代からの半世紀に及ぶ佐々井の膨大な手記や資料のアーカイヴの作成によって可能になった。このアーカイヴによって、佐々井秀嶺がいかなる過程を経て被差別民衆の苦しみを我がこととして生きる決意に至ったかを本人の直筆から再構成できる。つまり、このアーカイヴがエンゲイジド仏教研究の一級の基礎資料となり、今後は一般に公開されて更なる解読・研究の重要な鉱脈となることを意味している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 関根康正	4. 巻 No.2577
2. 論文標題 「差別の「当事者性」指摘」：根本達『ポスト・アンベードカルの民族誌』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中外日報	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 志賀浄邦	4. 巻 46
2. 論文標題 How to deal with future existence:sarvastivada, yogic perception, and causality	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Indian Philosophy	6. 最初と最後の頁 437-454
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10781-017-9344-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 鈴木晋介	4. 巻 5月号
2. 論文標題 伝統野菜と「生の風景」 未来の「特別な食べもの」を創るために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JOYO ARC	6. 最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木晋介	4. 巻 3-1
2. 論文標題 伝統野菜ムーブメントに関する人類学的研究1 エスノグラフィーの意義および文脈としての「ポスト生産主義」への移行に関する試論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 茨城キリスト教大学学術研究センター紀要 研究シリーズ	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀浄邦	4. 巻 第65巻
2. 論文標題 Problems Concerning Aptamimamsa	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『印度学仏教学研究』	6. 最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関根康正	4. 巻 45
2. 論文標題 < 往路と復路 > の人類学の地平：『ストリート人類学』の解題と補遺	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会人類学年報	6. 最初と最後の頁 1-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関根康正	4. 巻 84-4
2. 論文標題 『例外状態』論から再考するストリート人類学：脱ネオリベラリズムに抗する< 往路と復路 > の人類学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 387-412
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.84.4_387	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 志賀浄邦	4. 巻 25
2. 論文標題 Dialogues on substance (dravya) and modification (pariyaya) between Jaina and Buddhist philosophers: origin and development	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジャイナ教研究	6. 最初と最後の頁 17-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Sekine Yasumasa
2. 発表標題 Who is witnessing the Subaltern? : Rethinking from the theories of "Anthropology of Pollution" and "Street Anthropology"
3. 学会等名 早稲田大学INTERNATIONAL WORKSHOP "Visible (and Invisible) Boundaries of Distinction and Exclusion" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関根康正
2. 発表標題 問題意識・フィールドワーク・論文作成：その理論と実践
3. 学会等名 社会学研究科GSSP第3回公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根本達
2. 発表標題 斜線を描く 現代インドにおけるアンベードカライト運動と異カースト間結婚
3. 学会等名 第52回南アジア研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根本達
2. 発表標題 ダリト・インクルージョン、ピカミング・ダリト - ポスト・アンベードカルの不可触民解放運動と異カースト間結婚
3. 学会等名 マハーラーシュトラ研究会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 根本達
2. 発表標題 Disjuncture and Collaboration: Buddhists' Drinking Water Purification Project and Inter-caste Marriage in a Village near Nagpur
3. 学会等名 The 10th INDAS-South Asia International Conference "Inclusive Development in South Asia," (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木晋介
2. 発表標題 ポスト・アンバードカルの時代のインド仏教徒とトランスナショナル・ネットワーク スリランカ仏教徒との小さな交流が生み出すもの
3. 学会等名 B. R. アンバードカル及びエンゲイジド・ブディズム研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 志賀浄邦
2. 発表標題 世界の仏教を学ぶ Part 1 第1回 インド
3. 学会等名 仏教伝道協会 連続仏教講座(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 志賀浄邦
2. 発表標題 実体(dravya)と様態(paryaya)をめぐるジャイナ教徒と仏教徒の対論：その淵源と後代における展開
3. 学会等名 第33回ジャイナ教研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木晋介
2. 発表標題 スリランカ 暮らしのなかの上座部仏教
3. 学会等名 アジア文化講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木晋介
2. 発表標題 伝統野菜とローカリティ
3. 学会等名 スローフード茨城総会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関根康正
2. 発表標題 生死のヘテロトピア
3. 学会等名 民博共同研究会「現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関根康正
2. 発表標題 ストリート人類学の挑戦：ロンドンの南アジア系移民の場合
3. 学会等名 神奈川大学人文研究所研究会「帝国とナショナリズムの言説空間」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 関根康正 鈴木晋介 根本達 志賀浄邦
2. 発表標題 出家、共苦、慈悲、求道とは何か？
3. 学会等名 佐々井秀嶺師渡印50周年特別企画「佐々井秀嶺師との対話」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木晋介
2. 発表標題 シンハラ仏教ナショナリズムと路傍の仏堂
3. 学会等名 MINDAS「宗教班」2017年度第1回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 根本達
2. 発表標題 創発的宗教実践による佐々井秀嶺の聖者化 現代インドの仏教僧佐々井秀嶺と元不可触民のダイナミクス
3. 学会等名 2017年度第2回アジアの聖者に関する研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 志賀浄邦
2. 発表標題 How to deal with future existence: sarvaastivaada, yogic cognition, and causality
3. 学会等名 International Workshop: “Chance and Contingency in Indian Philosophy” (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 志賀浄邦
2. 発表標題 On some common scriptural sources cited by Ratnaakarashaanti and Kamalashiila
3. 学会等名 XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sekine, Yasumasa
2. 発表標題 On Street Anthropology
3. 学会等名 ERC Project "Art and Activism" Kick-off Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Sekine, Yasumasa
2. 発表標題 The Challenge of Street Anthropology
3. 学会等名 the 2016 Annual Congress of the Swiss Anthropological Association (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 志賀浄邦
2. 発表標題 Aptamimamsa 第59偈をめぐる諸問題
3. 学会等名 日本印度学佛教学会第67回学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 志賀浄邦
2. 発表標題 antarvyapthi and bahirvyapti re-examined with a special reference to bahyarthopasamhara advocated by Dignaga
3. 学会等名 Indo-Chinese Cultural Relations through Buddhist Path of Transcendence: Indian Logic and Epistemology in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 根本達
2. 発表標題 アンベードカルとガンディーのモデルの翻訳と接続についての試論：D.R.Nagarajを起点に現代ナグプルの仏教徒運動を人類学的に考察する
3. 学会等名 2016年度マハーラーシュトラ研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 根本達、前川啓治、箭内匡、深川宏樹、浜田明範、里見龍樹、木村周平、三浦敦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 381
3. 書名 21世紀の文化人類学 - 世界の新しい捉え方	

1. 著者名 関根康正、鈴木晋介	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 232
3. 書名 南アジア系社会の周辺化された人々	

1. 著者名 インド文化事典編集委員会 分担執筆 関根康正、鈴木晋介、根本達	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 770
3. 書名 インド文化事典	

1. 著者名 関根康正 分担執筆 鈴木晋介 根本達	4. 発行年 2018年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 762
3. 書名 ストリート人類学	

1. 著者名 関西学院大学社会学部 分担執筆 関根康正	4. 発行年 2018年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 110
3. 書名 2017年度チャペル講和集	

1. 著者名 関根康正、志賀浄邦、鈴木晋介、根本達	4. 発行年 2016年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 90
3. 書名 社会苦に挑む南アジアの仏教 B. R. アンベードカルと佐々井秀嶺による不可触民解放闘争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

B. R. アンベードカル及びエンゲイジド・ブディズム研究会  
<https://www.facebook.com/ambedkarengagedbuddhism/>  
 B. R. アンベードカル及びエンゲイジド・ブディズム研究会  
<http://ambedkar.blog.fc2.com/blog-entry-2.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 晋介  (Suzuki Shinsuke)  (30573175)	茨城キリスト教大学・文学部・准教授    (32101)	
研究分担者	根本 達  (Nemoto tatsushi)  (40575734)	佛教大学・社会学部・准教授    (12102)	
研究分担者	志賀 浄邦  (Shiga kiyokuni)  (60440872)	京都産業大学・文化学部・教授    (34304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関